

(研究報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	当事業所利用者の転倒における現状と課題 ～安全に生活していくために我々にできること～
演者名	野中一成
所属	ゆうあいの街クリニック訪問リハビリテーションゆうあい

研究方法 (右から番号を選び NO. 欄に番号をご記入ください)	1. 症例報告 2. 症例シリーズ報告 3. コホート研究 4. 症例対照研究 5. 調査研究 6. 介入研究 7. 二次研究 8. 質的研究 9. その他研究	NO.
		5
<目的> 在宅生活を安全に送るためには身体機能の管理や環境整備が必要である。高齢者の転倒による骨折等の事故はその後の在宅生活を困難にする可能性が高い。今回、過去 1 年間の当事業所利用者の転倒状況を調査し、その現状と課題を精査していく中で、転倒背景から今後の予防について考察する機会を得たので以下に報告する。 <方法> 平成 25 年 9 月から平成 26 年 9 月までの過去一年間の当事業所利用者の転倒歴を聞き取り調査を基に追跡調査した。調査内容は原疾患、年齢、介護度、転倒場所、転倒要因、時期とした。 <結果> 転倒歴のある利用者の年代は 70～80 代が 7 割を占めていた。原疾患は脳血管疾患で多く、複数回転倒しているケースも多く認められた。介護度別では要介護 2, 4, 5 に該当する傾向が認められた。転倒場所は廊下や居間で多く、要因として要介護 2 では不注意やアクシデント、要介護 4, 5 では病態認識の低下、介護者の管理不足などの要因が挙げられた。月別では一年間を通じ季節の変わり目に転倒しやすい傾向があった。 <考察> 転倒を繰り返す利用者は日中独居や老老介護であることが多い傾向から、身体機能や病態認識、認知機能を含め離床レベルを再確認し、本人と介護者に提示していく必要があると思われる。特に転倒場所が居間や廊下などで多いことから、普段の生活導線を考慮した適切な環境整備をしていく必要がある。また、季節的な問題も考えられることから、長期的な生活を視野に入れた評価や状態変化を早期に発見し対応していく観察力が必要である。 今後、転倒予防を支援していくためには身体、認知機能、介護力、住環境、生活スタイルなどのより細分化した転倒アセスメントを作成し、背景にある問題点を詳細に評価し、本人、家族も含めケアマネージャーや各サービス提供者との連絡を密にとり、支援対策を作成していく必要があると考えられた。		